

# 「LUNA SEA」のドラマーが闘う転移性脳腫瘍

## ガンマナイフや分子標的薬で予後改善

人気ロックバンド「LUNA SEA」のドラマー、真矢さん（55）がめまいで倒れ、検査の結果、脳腫瘍と診断されたと公式サイトなどで今年9月、公表しました。真矢さんは2020年にステージ4の大腸がんと診断され、7回におよぶ手術や抗がん剤、放射線治療を受けていたことも明らかにしています。脳腫瘍とは脳にできる腫瘍を指します。どのような腫瘍で、どんな兆候や治療があるでしょう。

70歳男性Aさんは今年4月、右手指の脱力があり書字困難となり、近所の医院を受診しました。MRI検査で左脳の前方に1・5センチの腫瘍が1つ見つかりました。総合病院の脳神経外科を紹介され、画像で転移性脳腫瘍が疑われ、胸腹部CTを撮ると、右肺上部に進行した肺がんが見つかりました。

脳の症状が進行するため、まずピンポイントで腫瘍だけに放射線照射する「ガンマナイフ」で脳腫瘍を治療しました。その間に肺がんを詳しく検査すると、「EGFR」という遺伝子に変異が見つかりました。放射線治療終了後、EGFR肺がんの治療薬を内服しました。症状は消失、脳と肺の腫瘍も縮小して経過は良好です。

脳腫瘍には脳の細胞から発生する原発性脳腫瘍と、肺がんや乳がんなどが脳に転移してできる転移性脳腫瘍があります。実は脳腫瘍の半数以上が転移性脳腫瘍です。近年、高齢化と診断技術の向上で転移性脳腫瘍が見つかる機会が増えています。

また、ステージ4のがんでも抗がん剤がよく効き、長期生存できるようになりました。その結果、遅発性転移として転移性脳腫瘍が増えています。

転移性脳腫瘍は男女比1・24と女性に比べ男性に多く、年齢は60代が多くなっています。診断時の脳転移個数は1個が約半数で、4個までが全体の8割と比較的限定的です。

## ■原発巣は肺がんが最多

もともとのがん腫の発生部位（原発巣）は、肺がんが最も多く半数近く、次いで乳がん 15%、大腸がん 10%ほどで、腎がんは 10%弱です。

原発巣によって、脳転移が起こる時期が異なります。肺がんでは半数以上で診断時に脳転移が見つかります。一方、乳がんでは診断後手術や抗がん剤などの治療を行った後、かなり時間が経過してから転移が見つかることが多いようです。腎がんはその中間が多いようです。

初発症状は、手足など体の一部がまひしたり、しゃべったり言葉が聞き取れなくなる失語症などを訴える人が約半数です。腫瘍で脳内の圧力が高まり、頭痛や吐き気・嘔吐（おうと）などの症状（頭蓋内圧亢進（こうしん）症状）が出て見つかる人もいます。一方で 2 割弱の人は脳の症状が全くなく、たまたま検査で見つかっています。

治療は外科手術、放射線照射、抗がん剤投与があります。転移個数、病変の部位と大きさ、脳以外の病変の有無、全身状態、がん腫の持つ遺伝子変異によって最も適した治療法を選択します。

治療目標は、症状の悪化を避け、生活の質（QOL）をできるだけ維持し、寿命を延ばすことです。ときには、余命の改善につながらなくても QOL が改善されそうであれば積極的に手術します。

最近ではガンマナイフや画像誘導放射線治療（IGRT）が開発されたことに加え、遺伝子変異があるがんには分子標的治療薬がよく効くようになり、QOL と予後は改善しています。